

リバプールにおける文化芸術を活用した 都市再生について

財団法人自治体国際化協会 交流支援部経済交流課

永田 豪

平成 25 年 1 月

はじめに

2012年11月1日から11月30日までの1ヶ月間、クレア・ロンドン事務所において海外事務所インターンシップ研修に参加した。自ら設定したテーマ「リバプールにおける文化芸術を活用した都市再生」について調査に取り組んだので、以下にその報告をする。

近年、文化芸術の持つ創造性を活かした産業振興や地域活性化、国際交流の取組などによる都市再生が注目されている。日本の自治体では、金沢市や横浜市などが早くから文化芸術創造都市の概念を都市政策の中に取り入れているが、日本各地の自治体で文化芸術を活用した様々な地域活性化等の取組が実施されているところである。私の派遣元である愛知県においても、2007年に「文化芸術創造あいちづくり推進方針」を策定し取り組みを進めている。

そうした取組みのなかでも、2年または3年ごとに定期開催されるビエンナーレやトリエンナーレといった芸術(美術)展覧会は、1980年代後半頃から国際交流や町おこし、観光客の集客、住民が多様な国の多様な芸術に触れる機会の創出を目的として始まり、現在では日本各地で開催されているところである。

世界に目を向けると、その語源となったヴェネツィア・ビエンナーレは、世界中から芸術家を招待して開催される展覧会として100年以上の歴史があるが、特に1990年代以降、世界中にこうした国際芸術展が増殖し、都市の再生や地域の活性化に大きな成果を上げている。また、欧州では、欧州連合が指定した加盟国の都市で、一年間にわたり集中的に各種の文化行事を展開する事業である「欧州文化首都」が1985年に始まり、観光客の誘引など経済効果も大きい事業として注目され、都市開発・再生の契機として、経済的に停滞した都市等がこの事業を活用し大きな成果を得ている。

本調査先のリバプールは、第2次世界大戦以降衰退の一途を辿っていたが、様々な都市再生プロジェクトが展開される中、1990年代頃から文化芸術が都市再生に活用され、港湾地区の再開発に伴う国立美術館の誘致・建設、英国随一の国際芸術祭となった「リバプール・ビエンナーレ」の開催、そして欧州文化首都2008の開催など、他の都市再生プロジェクトと連動して行われた。

今回の調査では、リバプールにおいて文化芸術政策を推進する行政機関 Liverpool City Council, Culture Liverpool 及びリバプール・ビエンナーレの開催事務局である Liverpool Biennial を訪問し、インタビューをする機会を得られた。また、現地を訪問した時期は、リバプール・ビエンナーレ2012も開催されており、実際にビエンナーレを体験できた事は非常に参考となった。これらインタビューやビエンナーレの体験

から得ることができた情報を踏まえ、調査した結果を報告する。

本報告書では、第 1 章で、まず概況説明としてリバプールを概観した後、第 2 章において、リバプールの文化芸術を活用した都市再生において大きな役割を果たしたと考えられる「欧州文化首都」と「リバプール・ビエンナーレ」について調査した結果を報告する。第 3 章では、リバプールにおいて文化芸術が都市再生に果たした役割について考察を行う。

【訪問先】

- 1 2012.11.5 Liverpool City Council, Culture Liverpool
Director Culture & Tourism Claire Mccolgan
- 2 2012.11.9 Liverpool Biennial
Artistic Director & Chief Executive Officer Sally Tallant

【参考資料】

- ・ LVERPOOL'08 European Capital of Culture–The impacts of a year like no other

【参考 URL】

- ・ Liverpool City Council
<http://www.liverpool.gov.uk/>
- ・ Liverpool Biennial
<http://liverpoolbiennial.co.uk/>
- ・ Liverpool Capital Of Culture 2008
<http://www.liverpool08.com/>
- ・ IMPACTS 08 - European Capital of Culture Research Programme
<http://www.liv.ac.uk/impacts08/>
- ・ A vision of BRITAIN
<http://www.visionofbritain.org.uk/>
- ・ LVERPOOL ECHO.co.uk
<http://www.liverpoolecho.co.uk/>
- ・ BBC NEWS -England
<http://www.bbc.co.uk/news/england/>

第1章 リバプールの概観

はじめに、調査対象であるリバプールについて、基本情報及び繁栄から衰退、そして再生へと繋がるその歴史について概観する。

第1節 リバプールの基本情報

ビートルズ誕生の地、フットボール・クラブのリバプール FC やエバートン FC の本拠地として有名であるリバプールは、イギリス北西部に位置するマージーサイド州の中心都市で、総人口は約 46 万 6,400 人（2012 年 7 月現在）、イギリスの人口がほぼ横ばいで推移する中、10 年前に比べ 5.5%¹の伸びを示している。



第2節 リバプールの歴史

1 リバプールの黄金時代

リバプールは 18 世紀頃から西インド諸島やアメリカとのいわゆる三角貿易によって大きく繁栄し、19 世紀の産業革命以後、1830 年にリバプールと内陸のマンチェスターを結ぶ世界初の鉄道が開通すると、マンチェスターからの綿製品の輸出を取り扱う海運の重要拠点として栄え、イギリス第一の港へと成長した。港の労働者数は 4 万人(現在は約 600 人)を数え、世界の貿易の 40%がリバプールを経由して行われるほどであった。1846 年にオープンしたアルバート・ドックは、鋳鉄、レンガと花コウ岩で建設された世界初の不可燃性の倉庫で、船の修復や係船、荷役作業のために築造されたものである。

また、貿易の発展にあわせて、造船業などの重工業や重化学工業も盛んとなって経済的に成功を治め、その結果、ヨーロッパからの多数の移民の流入によって人口が急増し、1930 年代には 86 万 7 千人の大都市へと成長し、ロンドンに次ぐ「大英帝国の第二の都市」と呼ばれるまでに発展した。ちなみに、リバプールは豪華客船タイタニック号の港でもあったことから、その繁栄が窺われる。

2 第二次世界大戦以降の衰退

しかし、第二次世界大戦以後、数十年間にわたる深刻な衰退期に入った。第二次世界大戦時に激しい爆撃にさらされるとともに、1940 年代後半には世界的な経済構造の転換等により繊維産業を中心とした貿易や造船業は急激に衰退した。さらに 1950 年代以降、英国全体が長期の不況に陥ると、それに同調して急速に没落し、経済という軸を失ったリバプールは、国内における地位を低下させていく。

¹ リバプールの地元紙 LIVERPOOL ECHO.co.uk より

1960年代以降も失業者は増加の一途をたどり、1980年代の失業率は英国内で最高となるほか、毎年約1万人の市民が市外へと転出し人口の流出・減少が進んだ結果、人口は最盛期の半分程度に落ち込み、街もスラム化するなどコミュニティも崩壊し、多くの社会問題を抱える都市へと一転した。

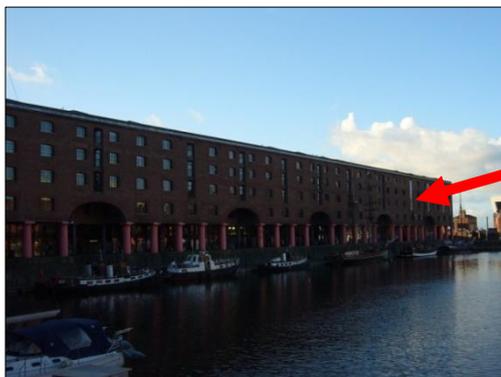
3 リバプールの都市再生の経緯

衰退の一途を辿っていた1960～70年代に大規模なスラム浄化と再生計画が始まり、1980年代には、かつて隆盛を極めたアルバート・ドックを中心とする港湾地区の再開発が着手された。美術館や博物館、ショップ、レストラン、ホテル等を集積したエンターテインメントの中心地区として計画され、マージーサイド海事博物館（1986年）やテート・リバプール（1988年）が誘致された。

しかしながら、この再生計画は中央政府主導で実施されたものであったこともあり、個別プロジェクトが中心で、リバプール市等が実施する他のプロジェクトとの連携に欠け、十分な成果を生み出すことができなかった。そのため、1999年には都市開発事業の枠組みをつくることを目的とし、**Liverpool Vision²**が設立され都市再生を推進した。また、2000年にはリバプール市が公益団体 **Liverpool Culture Company** を設立し、「文化」「観光」「投資」の観点からリバプールの将来像を描き、経済の活性化や雇用の創出などリバプール市民の経済的基盤の整備を計画し、都市再生を図った。

なお、大英帝国絶頂期の海洋交易拠点としての姿を残している一部の地区は「海商都市リバプール」の名で、2004年にユネスコの世界遺産に登録されるなど、現在は港湾部の各種施設やビートルズゆかりの建物などの文化遺産を利用した観光に力を入れ、人口も微増ではあるが増加している。

写真 再開発後のアルバート・ドック



[アルバート・ドック全景]



[テート・リバプール]

² 市が設立した都市開発株式会社。リバプール市の都市開発計画等を手掛ける。

第2章 欧州文化首都とリバプール・ビエンナーレ

本章では、リバプールの文化芸術を活用した都市再生において、その中心的存在となった「欧州文化首都 2008」及び「リバプール・ビエンナーレ」について、Liverpool City Council, Culture Liverpool（以下、Culture Liverpool）及び Liverpool Biennial 事務局へのヒアリングをもとに報告する。

第1節 欧州文化首都の取組みと成果

欧州文化首都は、欧州連合が加盟国の都市を選定し、一年間にわたり集中的に様々な文化行事を展開する事業で、文化的な発展はもとより観光客の誘引など経済効果も大きく都市再生への期待も大きい。リバプールも、欧州文化首都 2008 を開催し、文化芸術を活用した都市再生において大きな役割を果たしたと考えられている。

1 欧州文化首都 2008 の選出

1999 年に、リバプールは英国文化・メディア・スポーツ省から欧州文化首都への応募を打診され、欧州文化首都 2008 への立候補を決めた。Liverpool Culture Company を中心に誘致活動を行った結果、同じく立候補した英国内の 12 の都市の中から 2003 年 6 月に「欧州文化首都 2008」に選出³された。

リバプールが欧州文化首都 2008 の開催にあたって掲げたビジョンは、世界規模の芸術イベントの開催、誰もが興味を持つ催しの実施、都市の再構築、都市のネガティブな要素への挑戦、可能な限り多くの人を巻き込んだ取組みの実施、都市再生への貢献、持続可能性が挙げられる。

また、リバプールが立候補に際して提案した欧州文化首都 2008 の主な特徴は、誰もが知るビートルズやフットボールチームだけでなく、アルバート・ドックやセント・ジョージ・ホール等の文化遺産が豊富で、多くの国立の博物館や美術館、劇場や有名なオーケストラも存在するなど文化芸術の土台があることや、リバプール市民の誰もが芸術に触れることができるようなプログラムを企画すること、そして欧州文化首都 2008 以降の持続可能性を意識したプログラムを実施することも特徴的であった。

なかでも、市民の創造的な地域交流を目的としたプログラム「クリエイティブ・コミュニティ」を事業の柱の一つとして計画したことは、欧州文化首都に選定された大きな理由の一つと言われており、市民参加型のプログラムを軸にして、市民の自尊心や向上心を高めることに焦点を当て、長期的に文化遺産を維持する計画を推進した。

³ 英国では 1990 年にグラスゴーが開催している。次回の英国での開催は 2022 年であるが、開催都市は未定。

Culture Liverpool Director の Claire Mccolgan 氏は、欧州文化首都 2008 に応募してから選出され、開催されるまでのリバプールの状況について、次のようにインタビューに答えている。

「今から 12 年前、欧州文化首都 2008 に応募を決めた 2000 年頃のリバプールは現在と全く異なる場所であった。今は誰もが目にすることができるアルバート・ドックやウォーターフロント地区、ショッピングセンターなどの再開発は存在しなかった。それよりも重大な問題は、リバプール自身が『信頼』を失っていたことであった。当時は、人口減少も続くなど、とても深刻な衰退時期であり、リバプールは英国内の地方自治体の中でも最悪の状態であるといわれ、開発業者の選択肢の中に全く入っていなかったのである。

また、リバプールはビートルズを始め、1980 年代アート、数々の美術館・博物館や劇場、フットボールチームなど素晴らしい文化遺産があったものの、残念ながら、それら文化遺産を上手くコーディネートすることができておらず活用できなかったことも大きな問題であった。

しかし、2003 年に欧州文化首都 2008 に選出されるとリバプールは都市再生への大きなチャンスを得た事となった。都市を再生するために計画されていた開発事業やアリーナ、コンベンションセンター、新しい美術館の建設等が 2008 年の欧州文化首都の開幕という明確なエンドポイントを得たことにより、急速に進むこととなった。また、多くの文化遺産も欧州文化首都 2008 を開催するためコーディネートされるようになったのである。欧州文化首都 2008 の選出は都市再生のためのロケット燃料のようなものであった。

また、市内の芸術団体も、都市の再生において大きなリード役を果たすことになり、彼らの存在がリバプールの将来の発展に不可欠と見られ、リバプールにとって本当に重要な存在であると見られるようになったのである。」



写真(右) Claire Mccolgan 氏

—欧州文化首都とは？—

欧州文化首都 (European Capital of Culture) は、欧州連合が指定した加盟国の都市において、一年間にわたり集中的に様々な文化行事を展開する事業である。1983 年にギリシャの文化大臣メリナ・メルクーリが提唱し、1985 年にアテネを最初の指定都市として始まった。加盟国を原則一つずつ巡回する形で行なわれ、順番にあたる国の政府が開催都市を決定する。

当初は各国の首都など、文字通り欧州を文化面で代表する都市が選ばれることが多かったが、やがて単なる文化事業ではなく、観光客の誘引など経済効果も大きい事業として注目されるようになると、都市開発の契機とすることを企図して、

比較的知名度やイメージが見劣りする経済的に停滞した都市などを選ぶ例が増えていった。

欧州連合への加盟国が増加し、この事業の導入希望が増えたことを受け、2000年には一挙に9都市が指定され、2001年以降は年次によっては複数の都市が指定されるようになった。

文化首都に選ばれるためには、欧州全体の文化の特徴を備えた文化プログラムを計画し、またそのイベントにはその都市の市民の参加も不可欠である。選ばれるイベントのテーマや芸術家や運営者も欧州各国から集まったものでなくてはならず、またプログラム自身もその都市の長期的な文化、経済、社会発展に継続的な効果のあるものでなくてはならないとされている。(Wikipedia 参照)

2 欧州文化首都 2008 の実施

欧州文化首都の推進体制として、リバプール市は2004年にThe Culture Company⁴を市役所内に設置した。この組織は、自治体職員だけでなく民間等の外部からもメンバーを招集し、市とは独立した形で運営された。The Culture Companyは、各種専門分野の8部署(Artistic, Event, Heritage, Tourism, Community, Welcome, Commercial, Marketing)から構成され、これらの部署が欧州文化首都2008の実施に向け、一体となって活動した。



欧州文化首都2008のメインテーマは「The World in one city」で、ヨーロッパはもちろん、世界の他の地域とも積極的に繋がるとともに、文化遺産や海商都市リバプールの歴史的特徴である街の多様性に焦点を当て、それらを積極的に活用したプログラムを企画した。また、リバプールをヨーロッパ最高の都市の一つにすること、包括的でダイナミックにコミュニティへ力を与えること、持続可能な文化及び経済的利益をリバプール市民そして次世代にもたらすことを目的として、プログラムが企画された。

欧州文化首都2008は2008年1月に幕を開け、年間を通じて様々なイベントやプログラムが実施された。オープニングイベントでは、世界遺産の一部であるSt Georges Hallを中心に盛大に行われ、元ビートルズのSir. Ringo StarrがSt Georges Hallの屋上で演奏するなど、約800人のパフォーマーが会場に集まった5万人の観客を魅了するとともに、世界中の約300万人の人々が視聴したと言われている。6月にはThe Liverpool Sound Concertを開催し、同じくビートルズのSir. Paul McCartneyが演奏するなど、地元で開催された欧州文化首都2008を盛り上げた。また、9月から約10週間、欧州文化首都2008の中心イベントの一つ

⁴ 2009年以降、リバプール市の文化セクション Culture Liverpool に活動が継承されている。

として第5回リバプール・ビエンナーレも開催された。

約7,000のイベントが366日間の開催期間において連日のように開催され、参加アーティストは国内外から約1,000人を数え、観客動員数は1,500万人にも上った。また、美術館やギャラリーに訪問したリバプール市民の割合が70%、子ども・青少年の参加者数は約67,000人、そして運営には約1,000人のボランティアが関わるなど多くの地元の人に関与しており、リバプール市民が直接芸術に関わるようなプログラム（クリエイティブ・コミュニティ）が実施された成果であることが窺える。

欧州文化首都2008の様子（LIVERPOOL'08 European Capital Culture より）



[オープニングイベント at St. George Hall]



[Street に溢れる多くの見物人]

3 欧州文化首都2008の成果

欧州文化首都2008の主な実績は下表のとおりである。その経済効果は8億ポンド、投資額は40億ポンドにも上った。また、開催期間中の1年間の観客動員数約1,500万人のうち4人に1人がリバプールに初めて訪れた人であった。都市の好感度は英国内で第3位になり、都市の活性化の印象として79%の人々がリバプールを勢いのある都市と考えているという結果が残されている。

表：欧州文化首都2008の主な実績

項目	実績	備考
開催日数	366日	2008年1月1日開幕
イベント数	約7,000件	
参加アーティスト数	約10,000人	
ボランティア数	約1,000人	
観客動員数	約1,500万人	リバプールに初めて訪問した人の割合は25%
経済効果	8億ポンド	約1,280億円(当時160円で計算)
メディア効果	2億ポンド	約320億円(当時160円で計算)
投資額	40億ポンド	約6,400億円(当時160円で計算) ※2000年からの投資総額でインフラ整

		備等の費用も含め、約 300 件の大きな開発が行われた。
美術館・ギャラリーに訪問した市民の割合	70%	英国平均は 59% ※一年に一度、美術館やギャラリーに訪問する人々の割合
子ども・青少年の参加者数	約 67,000 人	
都市の好感度	英国内第 3 位	第 1 位：ロンドン、第 2 位：エジンバラ ※コンデ・ナスト・トラベラーの調査
都市の活性化の印象	英国内第 1 位	79%の人々がリバプールを勢いのある都市と考えている。

※Liverpool'08 European Capital of Culture から作成

この結果からも分かるとおおり、欧州文化首都がもたらした経済効果は莫大なものであったが、Culture Liverpool Director の Claire Mccolgan 氏は、これら数値で表される成果も勿論重要なことではあるが、それよりもまして重要な事は「リバプールが『信頼』を取り戻したことである。」と言う。Claire Mccolgan 氏は次のように話した。

「欧州文化首都 2008 は、リバプールに膨大な経済効果をもたらした。しかしながら、最も重要な事は失っていた『信頼』をこの一年間で取り戻したことである。以前のリバプールは、開発業者の間で選択肢になかったが、『信頼』を回復した現在では、リバプールは開発業者にとってビジネスのために投資するとともに働くための場所になったのである。

欧州文化首都 2008 が終わった 2009 年以降、予算が限られる中、リーマンショックに始まる経済不況も加わり財政的には非常に厳しい状況ではあるが、欧州文化首都 2008 によってもたらされたリバプール市の勢いや活気をできる限り継続するよう努力しており、特にリバプール・ビエンナーレやテート・リバプールなどの国立美術館を始めとする文化芸術は、都市を継続して機能させるとともに、観光など経済の最大の成長因子として、また都市再生の中心として活用していきたいと考えている。」

インタビューにおいて、Claire Mccolgan 氏は、何度も『信頼』という言葉を繰り返していた。欧州文化首都 2008 がもたらした経済効果は確かに莫大であるが、それだけで終わってしまっては、その効果はやがて消えてしまうことを意味しているであろう。「大英帝国の第二の都市」と言われていたリバプールが、第二次世界大戦以降は衰退の一途を辿り、その地位は非常に低下したが、欧州文化首都の開催後、都市の活性化の印象が英国内で第 1 位となったことや好感度が第 3 位

となった事からも分かるとおり、『信頼』を回復し、英国内でのリバプールの地位を再び高めたことが、今後も継続して発展していくために重要であるということが窺えた。

第2節 リバプール・ビエンナーレ

リバプールにおける文化芸術を活用した都市再生において、その大きな契機となった欧州文化首都 2008 について前節で報告したが、その欧州文化首都 2008 に選出される以前から開催され、リバプールが文化芸術都市として再生されるための礎にもなったリバプール・ビエンナーレについて、インタビュー及びリバプール・ビエンナーレ 2012 を実際に体験したことを通じて報告する。

1 リバプール・ビエンナーレの概要

リバプール・ビエンナーレは英国最大の現代アートを中心としたビエンナーレ形式の国際芸術祭（2年毎に約10週間開催）で、1998年にAファウンデーション⁵のジェームス・ムーアズ氏によって創設され、1999年の「第1回リバプール・ビエンナーレ」から2012年までに計7回開催されている。欧州文化首都2008の中心的イベントとして開催された第5回リバプール・ビエンナーレには、約100万人の来場者が国内外から訪れ、2,660万ポンド（約42億5,000万円）の経済効果があったとされている。

主な活動目標は、質の高い芸術の約束、人々が芸術に触れる機会の増大、パートナーシップ及びコラボレーションを通じた活動の促進、芸術的なリスクを負ったイノベーションの推進、現代文化におけるアートの可能性の拡大である。また、主な事業は、ビエンナーレ形式のフェスティバルの開催、ギャラリー・屋外・ウェブサイトでの展示、新しい作品やパブリックアートの委嘱、出版（展覧会カタログ、批評誌）、アーティスト・トークやディスカッション・セミナーなどイベントの開催、市民参加プログラムやワークショップ等の開催である。

また、リバプール・ビエンナーレは、「アート」「人」「環境」を活動理念の基本的要素とし、リバプールの芸術の発展を通じて地域の発展や人々の成長に貢献するために企画段階から地域と地域住民を理解するための調査を実施しており、公共機関だけでなく地元企業とのパートナーシップを形成して、「人」と「環境」の相乗効果による都市再生も目指している。

2 リバプール・ビエンナーレの特徴と都市再生に果たす役割

リバプール・ビエンナーレの大きな特徴の一つは、文化施設での展覧会以外に

⁵ 現代アートの発展を支援する財団。1998年にジェームス・ムーアズが設立。LiverpoolとLondonにスタジオと展示スペースを持ち展覧会を実施しているほか、アーティストへの助成も行っている。

街の中の公共空間におけるパブリックアートを数多く手掛けていることであり、現代アートの立場からリバプールの都市再生に貢献している。

Liverpool Biennial の芸術監督兼最高経営責任者の Sally Tallant 氏は、リバプール・ビエンナーレの特徴と都市再生に果たす役割について、インタビューで次のように話している。

「リバプール・ビエンナーレは、世界中の芸術家に新に作品の製作を委嘱し展示する英国最大の現代アートの展示会である。それらの作品とプロジェクトは、街のギャラリーや美術館・文化施設だけでなく、公共スペースなどの屋外にも飛び出すなど、街をギャラリーとして取り扱い、通常とは違う予想もできない場所で展示・展開する。また、芸術家は市民や団体とパートナーシップを築き、市民を巻き込んで作品やプログラムを製作していくことによって、芸術家そして芸術が市民の生活に浸透していく。これが最大の特徴であると言える。

リバプール・ビエンナーレが、都市再生に果たしている役割はほんの一部に過ぎないと考えている。都市再生の問題は非常に複雑で、住宅問題、都市計画、住民生活、教育など様々な問題が絡み合っており、芸術もその一つなのである。ビエンナーレはその一部の役割を果たしているに過ぎないのである。」

Sally Tallant 氏は上述のように謙遜して語ったが、リバプール・ビエンナーレはリバプールの地域そのものをギャラリーとして取り扱い、市民とアーティストが一緒になって作品制作を行う仕組みを企画することにより、実際に芸術を市民に浸透させている。芸術面から都市再生に大きな役割を果たしたという自負が、彼女の語り口から窺えた。



写真(右) Sally Tallant 氏

また、Sally Tallant 氏は、都市再生・地域活性化を行うには、一つの地域に集中して継続的に実施することが重要であると言う。

「Liverpool Biennial のオフィスは、市の中心部から少し離れた倉庫の跡地を改良した場所にあるが、ここの周りには最初何も無かった。しかし、同じ場所に居続け仕事をするにより、最近ではすぐ近くにカフェもでき、人が集まるようになってきた。地域が変わっていく様子は非常に緩やかな変化であり、1~2回の事業実施だけでは、その変化を見る事はできない。一つの地域に焦点を当て、同じ場所で挑戦し、永続化することが地域を活性化させるためには重要である。」

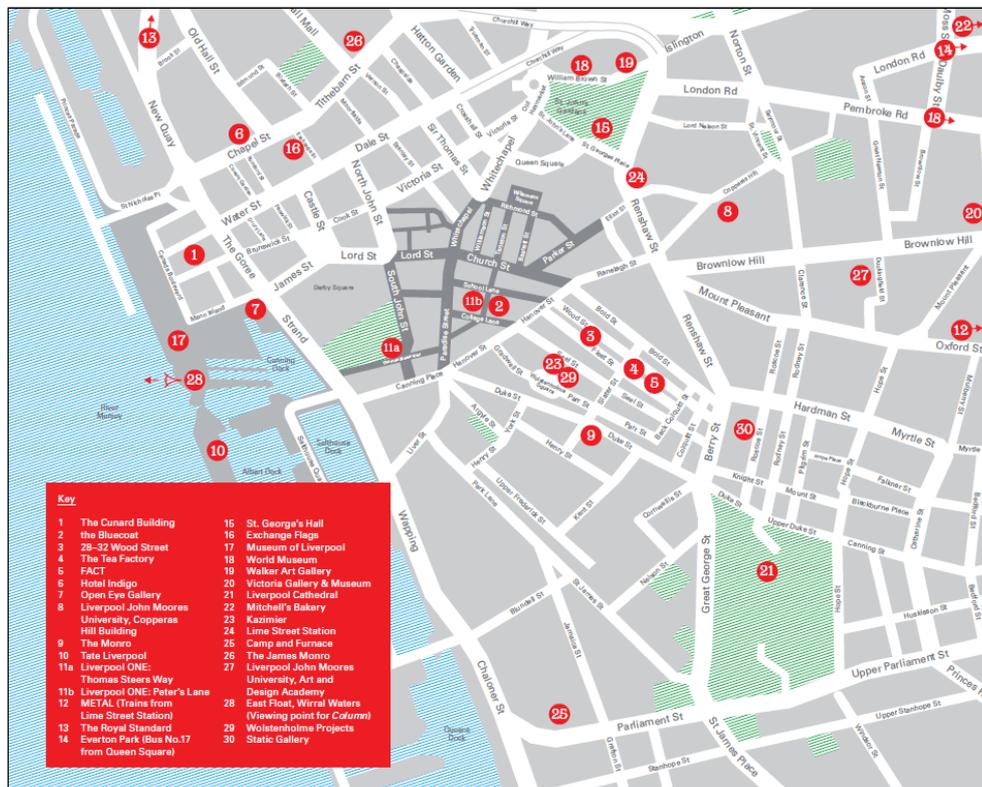
リバプール・ビエンナーレ成功のポイントは、素晴らしい芸術家に新たに作品を委嘱し、常に最高の作品を作り上げていく事はもちろんのことであるが、継続して開催していくためには、どれだけ市民を巻き込むことができ、市民に芸術を

浸透させるのが重要であることが窺えた。また、地域の変化はすぐには現れないことから、地域活性化・都市再生のためには、継続して事業を行い永続化することが必要であることを改めて確認することができた。このことは、文化芸術だけでなく、自治体が行う様々な事業にも言えることであると感じた。

3 リバプール・ビエンナーレ 2012

2012年9月15日から11月25日の10週間、242人のアーティストによる現代アートが展開され、トークイベントやフィルム上映、家族参加を対象としたワークショップなど約150のイベントも開催された。その大きな特徴は、前段でも述べたとおり美術館やギャラリーだけでなく、大学・ホテル・公共スペースなど市内27箇所（下地図参照）において展開されたことである。実際にいくつかの美術館やギャラリー、大学等で展示される作品を見て回ったが、会場間の多くを徒歩で移動することができた。インタビュー後の少ない時間を活用して駆け足で訪ねたものの、日本人芸術家の作品を始め多くのアートに触れることができた。

大学の空きスペースやメインストリートの裏の小さなストリートにあるギャラリー、カフェやシアターがある複合ビル内でのオープンスペースでの展示など、街の中に芸術が溶け込んでいる印象で、市民が気軽に芸術に直接触れることができるような展示となっていることや、また入場料が必要無いことも市民が芸術に触れる機会の増大に繋がっていると感じた。



リバプール・ビエンナーレ 2012 地図（赤丸が会場） ※公式 guide から抜粋

私が訪ねたのは平日であったため、イベントは実施されていなかったが、週末にはアーティストと地域住民が一緒になって活動を行うアートイベント（コミュニティアート）も数多く実施されているとのことであり、市民の芸術への参加を促している。文化芸術による地域活性化のためには、地域住民が参加し楽しむことが重要であり、市民の参加を促し、市民が直接文化芸術に触れるような機会をつくる仕掛けが様々な面で行われていることが、実際リバプール・ビエンナーレ 2012 を訪問して分かった。

写真 Liverpool Biennial 2012 の会場・展示の様子



[Street の gallery 入口]



[大学の空きスペースを活用]



[日本人写真家の作品]

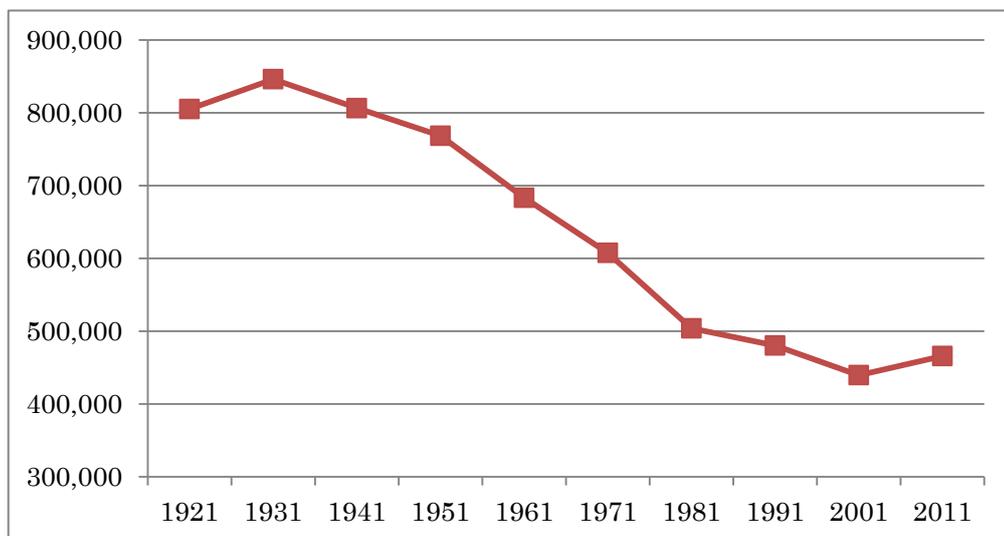
第3章 リバプールにおいて文化芸術が都市再生に果たした役割

第1節 数字から見るリバプールの再生

リバプールの人口は下表 1-1 のとおり、1930 年代以降、2000 年まで下降の一途を辿っていた。しかし、2000 年辺りを境に僅かではあるが人口は増加しており、この 10 年間で約 5.5% の伸びを示している。特に欧州文化首都 2008 が開催された 2008 年以降の人口増加は顕著(表 1-2)であり、人口減少に歯止めをかけ、逆に増加させた意味からも、芸術文化が都市再生に一定の役割を果たした事が窺える。

表 1-1 : Liverpool の人口推移 (1921~2011 年)

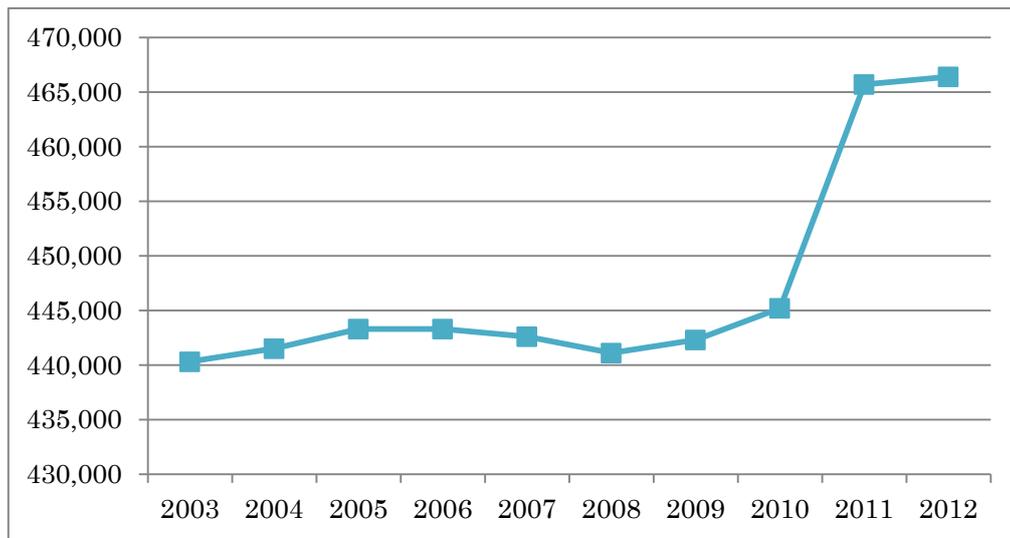
単位：人



※A vision of BRITAIN から作成

表 1-2 : Liverpool の人口推移 (2003~2012 年)

単位 : 人

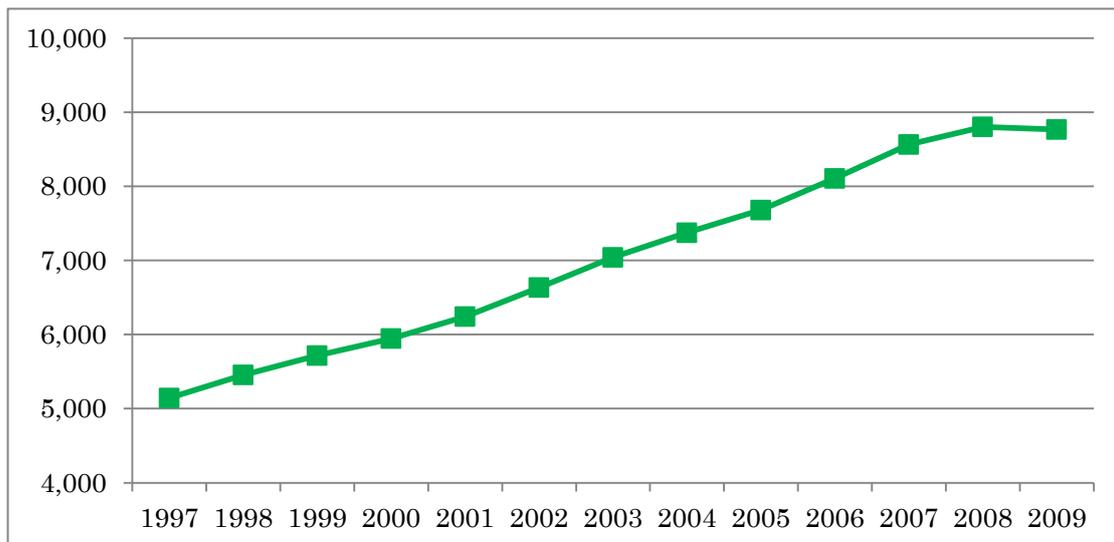


※Liverpool City Council から作成

また、GVA⁶ (Gross Value Added) を見ても、1997 年からリーマンショックが起きた 2008 年までの間で 70.4% 上昇しており、全英国平均の 70.0% を上回る数字である。特に 2005 年から 2009 年の間に 14.2% (全英国平均 12.5%) 上昇していることや、リーマンショック後の 2008 年から 2009 年の間で $\Delta 0.4\%$ (全英国平均 $\Delta 2.1\%$) の減少にとどまった事は、欧州文化首都 2008 開催による影響が大きいこと、そしてその結果、リバプールが開発業者の信頼を取り戻し、ビジネスの対象の場となったことが数字からも窺える。

表 2 : リバプールの GVA の推移 (1997~2009 年)

単位 : £ m



※Liverpool City Council から作成

⁶ GVA=粗付加価値額。減価償却費を含む付加価値 (生産活動によって新たに生み出される価値) の総額

第2節 考察

リバプールにおけるウォーターフロントや市街地等の再開発は、必ずしも欧州文化首都に併せて行われたわけではないが、インタビューからも分かるとおり、欧州文化首都の開催がそれら再開発事業の明確なエンドポイントとなり、都市再生が加速したことは明らかである。

欧州文化首都の開催によってもたらされた経済効果は莫大なものであるが、それにもまして都市再生において重要であったことは、リバプールが都市として失っていた『信頼』を取り戻し、投資や開発に値すると認められたことである。『信頼』を回復したことによって、今後の都市の再生や活性化に繋がっていくことが調査を通じて分かった。

また、欧州文化首都やリバプール・ビエンナーレが都市再生に果たした役割として大きかったと感じたことは、芸術文化を通じて開発事業者や文化芸術関係者だけでなく、リバプール市民の意識も変化させたことである。文化芸術が市民に浸透することにより、市民が自分の市に対して『自信や誇り』を持つようになっていったことが調査から窺えた。

Culture Liverpool Director の Claire Mccolgan 氏や Liverpool Biennial の Sally Tallant 氏が話すように、リバプールにおいて都市再生が成功した要因は港湾地区や市街地の再開発、住宅対策、教育施策など様々な事業や施策が実施されてきた結果でもあり、文化芸術の活用だけで都市再生が図られたわけではない。しかしながら、欧州文化首都の成功やリバプール・ビエンナーレが継続して開催されてきたことは、リバプールの都市としての『信頼』を回復させ、市民に自信や誇りを取り戻すきっかけを与えたと考えられる。リバプールにおいて文化芸術が都市の再生に果たした役割は、この点にあるのではないかと感じたところである。

おわりに

リバプールにおける調査の1ヶ月前、愛知県主催のイベントにおいて、リバプール・ビエンナーレの創立者の一人で、2000年から2011年まで芸術監督を務め、現在は「あいちトリエンナーレ2013」にキュレーターとして参加する Lewis Biggs⁷氏の講演を聴講する機会に恵まれた。

Biggs 氏は、貿易が盛んで国際的な雰囲気の特徴であったリバプールは、1960年代以降、経済の衰退によって内向きで単一的な文化になってしまったと語る。ビエンナ

⁷ 1990年から2000年までテート・リバプール美術館の館長も勤める。

ーレ創設時は、財政的に非常に厳しかったが、リバプールを住みやすく良い街にするため、小さくても大きな影響を与える力を持つ芸術の力で、人々に外に目を向けてもらい、同時に自分の住んでいる都市に誇りを持って欲しいとの願いからビエンナーレを始めたそうである。

欧州文化首都 2008 に選ばれた決め手の一つは、ビエンナーレを開催してきたことによってリバプールが「国際的な祭典」を開催できる都市と認められたことが大きな要因だったとのことである。市民の意識も内向きから外向きに変化し、人々の交流が盛んになり、議論や話題の内容も豊かになったそうで、リバプール・ビエンナーレはアーティストの育成や芸術の振興だけでなく、市民の意識をも変えていくことができていると語る Biggs 氏の言葉はとても印象的であった。

リバプールは、かつての貿易や産業都市から、都市の文化遺産やビエンナーレ・欧州文化首都のイベントなど、文化芸術を活用し、観光産業を中心とした都市へと再生を果たしてきた。現在、リバプール市も他の都市と同様に財政が厳しい状況であるが、文化芸術を都市の発展に欠かすことのできないものと捉え、今後も文化芸術に対してはできる限り予算を削らずに頑張っていくつもりだと Claire Mccolgan 氏は強く語ってくれた。Sally Tallant 氏が話すように芸術を市民に浸透させることや、地域が変化していくのには時間がかかる。地域の活性化や都市の再生には、市民を巻き込んだ施策を継続して実施することが重要であると感じたところである。

最後に、今回の研修中に訪問を受け入れてくださった方々、また訪問先へのアポイント取得の支援から情報提供など、様々なサポートをしていただいたロンドン事務所に心から感謝の気持ちを申し上げる。